

病院臨床検査部門のポテンシャル 経営者はまだ気づいていない収益貢献部門

関西医科大学保健医療学部臨床検査学科教授 上田一仁

0.はじめに

新型コロナウイルス感染症の拡大時には補助金等の収入があり経営を維持できていた医療機関が感染収束後、軒並み赤字経営となっています。特に国立大学系附属病院の経営悪化が深刻化しており、全国の国立大学学長は文科科学省と厚生労働省に対し、運営費交付金や診療報酬の引き上げなどを求める要望書を提出しました。報道では2025年度の経常損益は全

国で400億円を超える赤字となる見込みとされています。また民間病院でも赤字転落が50%に迫る数値であるとも報道されています。その原因は人件費の上昇および医薬品や医療機器の高騰によるものであり経営改善努力だけでは埋めきれない状況となっているのではないかと考えられます。そのような中、高市早苗首相は物価高の影響により経営が悪化している医療機関を支援するため、2026年度の診療報酬改定を待たず、2025年度補正予算で補助金支

給等の対応を行う方針を示したことは一筋の明かりかもしれません。とはいえ、その規模や内容は現時点では不透明であり個々の施設での経営改善努力も継続していかなければなりません。その「経営改善努力」は診療科の強化やマーケティングによる外来患者の獲得など目に見える収益源に偏りがちですが、臨床検査部門がその一端を担えるかもしれません。ここでは、一例を交えながら、その収益ポテンシャルについて紹介させていただきます。



うえだ・かずひと●1982年3月大阪府立公衆衛生専門学校卒業。1982年4月大阪医科大学附属病医中央検査部入職。2008年3月大阪大学医学部医学研究科保健学専攻大学院博士課程卒業。2012年4月市立芦屋病院臨床検査科。2018年3月現職